

雑草といふ草はなじ

下

岡田宇土

「釜ヶ崎」の歴史と栄光ある伝統について

これは、先月号に「特集・釜ヶ崎の歴史」の一つとしてのせた投稿の後半である。

支播、連帯、回結、密集を呼びかけるのは、消極的な態度であるか、緩慢な斗いなのであるうか。弱者、細民のみの行為であるのか。人間を、動物以下の「物」として扱うことの出来るのも人間である。他人の弱みにつけ込んで、自己の利益や欲望を、むさぼるのも人間である。そして、之等の対象となつて、苦しむのも、また人間である。

動物以上に不条理なことの出来る人間と、標のまま、文字通り何の飾りも意図することなく、人間をその人間性をむき出しにして、生きてゐる人々とは、どちらが真に、人間らしいのか。

俺たちが社会を支えている??

勉強になると考ふる。

この純之間ない連帯への、労働者間の呼びかけこそが、集団の独善性をなくして、回結の中での権威を発生させない状況を創ることにもなるのであると思う。

なんげんな回結がなす力

川つも重複になるのであるが、吾々の町、この釜ヶ崎は、われわれ主役によつて、はっきりした一ツの意志、路線を明示されることを待つてゐるのだ。

資本主義の荒波にもみぬかれ、打ちくだかれつつ、雑草の根強い生命力を失うことなく流れ続けてゐる大都会の孤島、われらの釜ヶ崎は、公民的な社会と偽善的な生活習慣に、そりの合わない人々の群れや、この故郷に、来るまでの前歴や身元について、他から聞かれたり、他に聞いたりすること、本能的に避けてゐる人々の集りから成り立つてゐる比率は、確かに大きい。しかしこの社会の赤裸

「私達は立ち心坊という名前のもとに呼ばれてゐるが、大阪のあらゆる産業につくしてゐる」と吾々は叫ぶ。われわれは社会の邪魔ものでは決してない。大阪と云う巨大な経済機構が、それ自体の成長と循環をいとなんでいくう之で、欠く事の出来ない存在である。而も、吾々は常に貧困なのだが、これを放置して来た政治や、行政の方が、もつと貧困である。

資本の頂上の自由と、労働者の底辺の自由と云う、最も一般的な現実の差違の前には、後者は、仲間意識としての連帯支援と、憲法で保障された回結権への、静かな、止まることのない呼びかけ以外に、積極的な人間運動はないと思ふし、われわれ各自の自覚的な、

々などん底の生活の中に、ほんどの人間らしさを見出してゐるのも事実である。

逆さな表現ではなく、これ程、純真な人間の密集があるであろうか。自然そのものとうか、哲学的でありさへする。

有害と知りつつ、廃液を垂れ流して、沿岸の住民を皆窮の極に追いやり、有妻が判明しても尚、その薬劑を市販する者たちこその方が人生の落伍者ではないのか。

釜ヶ崎の兄弟たち、胸を張つて確実に斗おうではないか。

われら名誉ある釜ヶ崎の主役、全労働者は生活困窮の現実にもかかわらず、生活保護法の適用を受ける者は、意外に少いと云うことは、どう云うことなのか。

職安は労務供給にお手上げとなり、保健所はドヤに立ち入ることをさせ、この偉大なる釜ヶ崎を、社会保障の光の当たらない谷間にし

眞空地帯で、呼吸し、大股に強い歩行を続け
ている釜ヶ崎の伝統は、永久に崩れ去ること
はないだろう。

集まる機会をつくらう。そして心身ともに
集まろう。共同体となろう。眞の労働者を斗
いに取るつ。

反共、というこの不思議な思想ほど、二十

世紀後半の政治を混乱させてきたものはない。
ひとたび、反共という魔術にかかると、そ
の前には幼見的な幻影が立ちあらわれて、そ
れを退治するためには、あらゆるものを犠牲
にしてもかまわないと云う、呪術的な昂奮に
駆られるらしい。米国の悪行、パトナム問題
を例にとるまでもなく、それぞれの地域の人
々にとっての、必死の実情というものを、計
算の要素としていなければ、いかなる権力も
敗滅して行くのだ。

かし労働を終えて、裸の故郷、釜ヶ崎に帰っ
て来ると、周りは皆んな仲間の眼である。

裏表のない、眞実の社会、飾り気のないう
会、ごまかしのない社会、虚栄とみ之に裏切
られない社会、われわれの街の連帯である。

貧困を恥ずかしいと考えている人が、あつ
たとしたらこれは大変なことである。少しの
環境の違いで、差別すら生まれてくる。ドヤ
の、冷酷な営業方針、あるいは二重温情主義
的方針のいずれにしても、無宿者に宿泊所を
、提供しているのだ。という表現で、彼等の
所業を正当化することを可能にさせる基盤は
、大社会の現象のなかに重要な原因があるこ
とを、われわれは肝に銘じなければならぬ
し、貧困が恥ずべきものと感じている労働者
意識も、その大きな原因の一ツであるう。

貧困は恥じることではない。怒ることであ
る。

わが釜ヶ崎に何かが起る。新聞は興味本位

わが釜ヶ崎人は、いかなる弾圧にも屈せず
粘りを發揮して、人生を肯定的に生きる所也
の民衆の生命力を伝受してきた。

唯、無縁仏として処理されていった諸先輩
に、申し訳なく思うこの頃の実情が、いかにあ
るが……。

確かに、貧困が人に及ぼす罪悪は、つよく
感じる。併しそれは、極めて悪性の病気であ
るとか、人々から生気を奪い、目も、耳も、
思考の器官を無能にしてしまふ程の罪悪の一
ツであるとは思わない。

オエラ方は、そのお好きな自由、平等、博
愛などと云うシオンの議定書的な民主主義
の日和見動作によつて、庶民の切実な、実情
の結束を、どう評過してオイデなのか。

貧乏人は罪を犯さなければならない

われわれは、老たさり貧の貧困である。し

に報道する。之を目にした大部分の人々は、
記事にふれる前に、又何かやりやがったか、
とくる。頭の芯まで植民地人民になり下つて
しまつた人々は、その思想の貧困を確にあげ
て、裸の体一つの連帯を持つているわれら、
釜ヶ崎人に、シカメ面をするのである。

どんなことにでも、悔と云うものがある。
これは待つてゐるものではないのは、当然で
あり、辛抱づよく、造りあげて行くものであ
る。

叩かれても、折られても、われわれ労働者
の連帯の意識は消滅しない。

強者は弱く弱者は強いのだ

時折、東南アジアに就いて不思議な感に、
うたれることがある。人類学者なども、よく
言うことであるが、この東南は、インドの東
シナ（中国）の南と云うことであり所謂イン
ドシナである。

この地は（国は）独自の名前で呼ばれないで、有名な他の国の方角で現わされたものである。いかに歴史的にも、政治的にも、他の地域から問題にもされていなかっただか、その主体性も、独自性も認められていなかっただかが解る。

では、インドシナの人々が、何の独自性も持たない無気力な集まりであつたらうか。オット、ドッコイである。

あの科学兵器と物量の大攻勢を、はね返して堂々たる主体性を認めさせたのである。

恥から誇りへ、希望から希望へ

之は、環境的にも、伝統的にも、わが釜ヶ崎と結びついてゐる島が多い。名称などの島では、わが地域の方が光つてゐる様に思ふ。

西成区といへば相当な広範囲なのに、善良（？）な大多数の人々は、西成というソク（？）な釜ヶ崎と思つてくれる。以て榮譽とすべきである。

あの暴動の夜、警官たちが、このバカヤロ！と言っただけでなく、このヨゴレ。と叫びながら、警棒でメッタ打ちしたその感覚に対して、考へはじめた。わが釜ヶ崎人は、理念においても結束力に於ても、一大音感となつてきてゐる。

めざめた労働者を、人間以下に押しもどすことを、目論んでゐるヒトよ。それを人間以下の行為と言ふのだ。

その行為は誰にもできないものなのである。非民主的な権力主義行使をする、現今の、民主主義と名乗る政府権力が、民主主義を、突明する青年達の民主的行動に、非民主的な抑圧でもって対処してゐる。言うべき辞句も用意できないが、勝敗、優劣は明白であることは、時間の問題である。

「釜ヶ崎保護」とは何か

労働者には、生活保護などという、この保護

アイルン地区などという、馬鹿げた呼称の類は無さに等しい。改めて偉大な伝統を肌感にする。

区長も、警察署長も権力の山頭であり、外部勢力であるドヤ経営者や飲食店も、前者との汚ない結びつきを考へると、明らかな敵である以上、仲間防衛線は、より固めなければならぬし、その線内での攻勢意識は必須となつてくる。

殺るべし、殺るべし、殺るべし

わが釜ヶ崎は、その主体性も独自性も殆んど認められていないにもかかわらず、権力、資本側の都合の悪い時は、随分と重宝がらされてきた。利用されてきた。が、この、利用してゐると云う被害を利用して一日一日、体で勉強し、釜ヶ崎から吸いあげていく被害のシクミを、はつきり理解した。

ここ数年のわが釜ヶ崎の連帯は、島の意味の民主平和勢力となつてきてゐる。

と云う名称がおかしい、と言ふ人が多い。非行少年を保護するとか、外国の救済法が浮浪者保護ならぬ、浮浪者取り締りを主目的としてゐるように、保護とは、取り締まりの意にはかならない。

生活保障であれば、憲法第二十五条にある国民の生存権、この権利に準仕する国の使命を意味すると思つても良いだろう。が、保護では話が違ふ。保護される者には、権利の存在が愛昧なものになつてくるし、例文保護の仕方が立派な内容のものであつても、それは保護者の慈悲と善意以外の何ものでもない。

たとへ貯金があつたとしても、収入が絶えな時侯が、生活保護法の適用となる権利発生状態であることが、この法の在り方と言わねばならない。極論ではあるが、

勿論、民衆の側の権利意識の開発が、早急の課題である。